

初級士官心得<抜粋>

- ◆ 熱と意気を持ち、純真であれ
- ◆ 常に修養に努めよ
- ◆ 広量(ひろしりょう)大度(だいど)で常に快活であれ
- ◆ 礼儀正しく、敬礼は厳格であれ
- ◆ 旺盛な責任観念を持て
- ◆ 進んで難事に当り、常に縁の下の力持ちとなれ
- ◆ 日常座臥(ざが)、研鎖(けんさ)に努めよ
- ◆ 信ずるところを断行せよ
- ◆ 報告はマメに行なえ
- ◆ 骨を惜しむな
- ◆ 自身で問題を解決せよ
- ◆ 命令は忠実に、その実施は拙速・確実であれ
- ◆ 船乗りらしくあれ
- ◆ 技術に対する関心を深めよ
- ◆ 回覧類は熟読せよ
- ◆ 小言をいわれるうちが花である。
- ◆ 良き当直士官たれ
- ◆ デアル、ラシカレ主義で行け
- ◆ 常に整理整頓を心がけよ
- ◆ 五分前の精神を堅持せよ
- ◆ 公私の別を明らかにせよ
- ◆ 他人の依頼には快く応ずる心がけを持て
- ◆ 物事にけじめをつけよ
- ◆ 常に部下と共にあれ
- ◆ 部下の指導には寛厳よろしきを得よ
- ◆ 功は部下に譲り、部下の過ちは自ら負う。
- ◆ ワングランスで評価するな
- ◆ 名前を覚えよ
- ◆ 部下の能力を確認せよ
- ◆ 短絡(ショートサーキット)を慎め
- ◆ 感情に訴える様な部下指導は避けよ
- ◆ 率先垂範の実を示せ
- ◆ テーブルマナーは一通り心得ておけ
- ◆ 上陸して飲食や宿泊する時は、一流の店を選べ
- ◆ 部下指導の基礎は至誠なり

J C会員心得（初級士官心得から抜粋、修文）

◆ 熱と意気を持ち、純真であれ

J C会員はそれぞれの会社の規律・元気の根源であることを自覚し、青年らしい純真さと若々しさの中に、熱と意気を失わず、勤務に精励せよ。

◆ 進んで難事に当り、常に縁の下の力持ちとなれ

会社の各部署の配置及び業務は千差万別である。各配置において皆が全能力を発揮することによって、会社全体の力を発揮できる。私慾にとらわれることなく、素直に物を考え、正しく物を見て、どんなに苦しい立場におかれても、すすんで難事に当る覚悟と縁の下の力持ちになるという犠牲的精神を持たねばならない。

◆ 日常座臥(ざが)、研鑽に努めよ

日常の業務そのものが勉強であることを銘記し、忙しい時程自分の修養ができると考え、常に寸暇を利用して、自己研鑽の資とすべきである。日常研鑽の資料・成果などは、常に整理して記録にとどめ、後日の参考にするがよい。

何事によらず、一事に通暁徹底し、第一人者となる心構えで努力すれば、ついには万般に通ずることができる。失敗の多くは、得意慢心の時に生ずる。会社運営にも多少慣れて、自己の力量に自信を持つ頃になると、ともすれば先人/創業者の思慮がかえって愚かしく見える時がある。これこそ慢心の危機に臨んだ証拠であり、最も慎むべきときである。かかる時は、よく先人の意図の理解に努めると共に、進んでその教えを乞う、謙虚にして熱心な態度が必要である。決して人を侮ったり、軽卒に批判すべきではない。

◆ 信ずるところを断行せよ

急激に変化するビジネス環境下においては、熟慮断行の余裕のない事が多い。日常研鑽によって得た信念にもとづいて、迅速果敢に決断をせよ、また如何なる場合にも、経営者、幹部たる者は率先垂範が必要であり、躊躇(ちゅうちよ)逡巡(しゅんじゅん)はますます、消極的気分を助長させる。信ずる処を断行して経験を深めよ。

◆ 報告はマメに行なえ

上級者は常に下級者のすべてをみているわけではないが、それらの行為に関して全責任を負っている。従って上級者は下級者の些細な行動まで十分に把握しておく必要がある。

何か起ったら必ず上級者に報告せよ、また作業が順調に進んでいる時でも「異常なし」と云うことを報告せねばならない。

◆ 命令は忠実に、その実施は拙速・確実であれ

上司から調査又は立案等を命ぜられた場合は、すぐ実施せよ。「明日にてなさん」は、禁物なり。上司の希望であっても、命令と考えて実行せねばならぬものがある。よく上司の意のあるところを察知する努力を欠いてはならない。

◆ 船乗りらしくあれ

昔から「スマートで目先がきいて凡帳面、負けじ魂これぞ船乗り（JC会員）」といわれているが、これをそのまま実行すれば良いのであり、経営者として欠くことのできない能力の養成と共に、絶えず心掛けねばならないことである。

◆ 技術に対する関心を深めよ

経営者は、とかく経営の研鑽のみにとらわれ、技術への関心、研究をおろそかにしがちである。会社の資源を全能発揮させる為には、そのすべてを詳細に知らねばならない。さらに技術の開発には経営者の一層の理解協力が必要である。

◆ 常に整理整頓を心がけよ

すべてあるべき物があるべき時に、あるべき所に、あるべき状態でスタンバイ（用意）しておくこと。これが会社運営の大切な要素である。

◆ 五分前の精神を堅持せよ

日本の社会では、集合時刻などに遅れることを、何とも思わぬ風習が根強く残っている。日常の諸業務についてだけでなく、公用以外の集合についても、「五分前」を厳守するとともに、引きあげもあっさりしているのがよい。社員は顧客を待つも、顧客は社員を待たず、である。

◆ 他人の依頼には快く応ずる心がけを持て

依頼とは、相手の好意に依存するものである。上級者といえども強要することはできない。しかし、下級者は上級者のみならず、同僚などの依頼に対しては、職務上差し支えない限り、誠意を以て応じるのが礼である。人にしてやったことは片っぱしから忘れ、ひとからして貰ったことはいつ迄も覚えている。

◆ 常に社員と共にあれ

いかなる仕事を命じても、必ずその終始を監督し、いわゆる放任主義に陥ってはならない。特に苦しい作業などの場合には、必ず最後まで現場にとどまり、仕事の状況によっては、風呂や夜食を用意することを考えてやれ。

◆ 部下の指導には寛厳よろしきを得よ

部下を指導するにあたり、あまりに厳格に過ぎてはならない。さればとて、寛に過ぎて放任に陥ってもならない。会社の業績をまっすぐに「宜候(ヨーソロ)」に向上させるためには、舵の取りっぱなしではダメで、「あて舵」「もどし舵」の呼吸が大事である。部下に悪いところがあれば、その場で遠慮なく注意せよ。しかし、叱る場合には、場所と相手を見てやれ。管理職を平社員の前で叱るとか、正直な心の社員をひどい言葉で叱りつけることなどは、百害あって一利なき行為である。

◆ 功は部下に譲り、部下の過ちは自ら負う。

「先憂後楽」とは味わうべき言であり、部下統御の機微なる心理もかかる処に在る。

◆ 名前を覚えよ

「オイ」とかいうのは社員の人格を無視した呼び方である。記憶法は色々あるが、入社後

早い時機に数名宛呼び、一人一人につき、家庭、特技等一般身上につき聴くことも一法である。

◆ **部下の能力を確認せよ**

係長に課長の仕事を命じ、その結果が不満足だとして叱るのは無理である。自分の考え、或は才能を以て部下を同程度に見ることは禁物、その能力相当の仕事を命ぜよ。但し、事ある時の為の訓練にやや上級の仕事を与え之を訓練することは大いに必要なことである。

◆ **感情に訴える様な部下指導は避けよ**

いわゆる、親分、子分的な関係をつくったり、自分の好みに合った部下をつくったりすることは好ましくない。将来、誰の下についても、真面目に勤務する良い部下をつくるように心がけよ。

◆ **率先垂範の実を示せ**

部下を率いるときは、常に衆に先んじて難事にあたる心構えがなければならない。また、自分が出来ないからといって、部下に遠慮、気兼ねをしたり、部下の機嫌を取ったりするようなことは禁物である。

◆ **部下指導の基礎は至誠なり**

至誠を根本とし、熱と意気とを以て会社経営の大任を担当する干城を築造する事に心懸けよ。